いまどきの現状 家族の果たす役割

家族で過ごす やすらぎの時間

家族みんなで夕食をとるのが週２回以下という家庭が約半分… これは昔に比べ、家族がそれぞれ個別に行動する時間が増えたことが原因の一つのようです。こういった家族のつながりの変化は、その役割にどのような影響をもたらしているのでしょうか。

時代と共に変化してきた家族のかたち

アンケート結果から少しだけ見えてきた家族のかたち。緩やかですが、ここ数十年でも確実にライフスタイルの変化が感じられます。自分自身を考えたとき、その記憶をたどれば、今とはわずかに「違い」があるように思えるのです。

幼いころ、母に手をひかれ夕食の材料を買いに商店街に行くのが楽しみでした。肉屋のご主人は大きな声で「おっ、いらっしゃい」と声を掛けてくれ、八百屋のご夫婦はわたしが好きなくだものをサービスしてくれます。そんな時間を、子ども心ながら心地よいと感じていました。家に帰って夕食を作る母の横で、保育園での今日の出来事を細かく報告。そうしているうちに玄関の扉が開く音が聞こえ、帰宅した父を出迎えます。小さなテーブルにおかずを並べ、家族そろって囲んでいました。

昔は当たり前だった風景がそうではなくなるのは寂しいものです。家族一緒の時間が永遠に続くように感じていたあのころ。しかしそれにも終わりがあることを実感します。子育てを終えた親は「子どもの世話を焼ける時間は、一生のうちからすればあっという間。そしてそれが一番大切な時間だったと、今だから思える」と口をそろえます。

家族一人ひとりの存在が自分にとってどれだけ大きな心の支えになっているか… 一般的には家族が身近にいることが当たり前のことなので、わたしたちは家族の果たしている役割を意外と理解していないのかもしれません。

大人にとっても子どもにとっても、ストレスの多い現代社会。帰る場所があるというのは、それだけで幸せなことです。そのことに気付いて家族がお互いを思い合い、家庭を〝安らぎの場所〟だと感じられることが理想的です。

家族のつながりが弱まっていると言われている今、実際にはどのような問題が起こっているのでしょうか。筑豊地区の18歳未満に関する相談を受けている田川児童相談所の稲生孝二さんにお話を伺いました。

Interview
稲生 孝二さん
児童養護施設の指導員、児童相談所京筑支所を経て、田川児童相談所相談課第一係長に。市町村と連携しながら子どもの問題に取り組んでいる。田川郡在住。

子にとって本当に必要なものは、お金で買える物では無いのです。

「非行問題などを起こした子の家庭の話を聞いていると、何か問題が起こる前には必ず兆候があることに気付きます。忙しくてなかなか子に構ってあげられない親は、子が送るサインを見逃しがちです。家族団らんの機会を少しでも持てていれば、この問題は防げたのかもしれないと、いつも残念に思います」。

また稲生さんは、子にいい教育を受けさせたり、金品を与えたりすることでしか愛情表現をしていない親にも問題があると考察します。親自身が、子どもにとって本当に必要なものが何なのかを、取り違えてしまっているようです。

「愛情を十分に受けていないために〝自分が家族の一員として本当に必要なのか〟と疑問を持つ子どもが増えています。そういう子は、本来安らぎの場であるはずの家に居場所が無いと感じ、友だちなどに影響され、やがて非行に走るパターンが少なくありません」。

さらに過度な習い事や一人で遊ぶゲームなどは、家族が個別に行動する時間を増大させます。現代における物質面の豊かさが、家族のつながりが弱まってきた原因の一つになっているようです。

平成18年度 田川児童相談所（京築支所を除く）
虐待の種類別対応件数 計255件

しつけと虐待の違い 我が子に伝わる親の思い

田川児童相談所では昨年度、1千924件の相談がありました。そのうち813件が障がいに関するもので、789件が虐待を含む養護問題に関する相談です。虐待は主に身体的虐待と保護の怠慢（ネグレクト）が大半を占めています。

「虐待をした親の言い分は、ほとんどが〝言うことを聞かなかったから、しつけのつもりでやった〟というものです。しかし、子どもはみんな規格に沿って育っていくものではありません。幼児なら幼児、小学生なら小学生目線で、自分の子どもの成長に合わせてしつけをしなければなりません。カッとなって怒るのではなく、きちんと愛情を持って叱って、諭して育てた子は、親の真意が分かっているので、仮に思春期になって悪さをした時に親がきつく叱っても、親に食って掛かることは少ないです」。

本来ならばいとしいはずの我が子に虐待をしてしまうのは、家族の役割が十分に果たされていないからではないでしょうか。自分が親に虐待を受けて育てられていたり、夫婦同士の思いやりが足りなかったりした場合に、虐待は起こりやすいといいます。親子、または夫婦同士がいかにお互いを尊重し、支え合える環境を作っていくかが、家族の力を発揮するために不可欠な条件だといえます。

次のページでは、そのよりよい家族関係を築くための具体的な方法を、いくつかご紹介します。

あのころは、みんなズボンに穴が開いていても平気だった。

昭和30年代前半。まだまるで戦前と変わらない生活だった。
部屋も狭かった。4畳半に7、8人で暮らす家族すら多かった。
若い家族の担い手たちは、貧しさから抜け出すため懸命に働いた。
そして企業は成長し、給料が上がり、次々と物を買うことができるようになった。
世界から「奇跡」と呼ばれた成長システムがそこにあった。
高度経済成長を遂げた日本は、物質的に豊かになった。
「豊かであることが人生の最高の幸せ」というのが定義になった。
子どもはかわいい服を着せられ、子どもが一人で遊べる商品が普及していった。
物質面での豊かさと引き替えに、失われたものがある。
時代が変わっても、決して変わってはいけないものがある。
家族のつながりが危ぶまれる今、かつての「豊かさ」というキーワードを捨て、
新しいキーワード、新しい子育てを見つけていくことが求められている。

昭和30年代前半の食卓風景